

21. 高知女子大学看護学会

高知女子大学看護学会は、看護学の進歩発展と、地域の看護職者の研鑽および看護の質向上に貢献することを目的として、看護学会の開催、公開講座の開催、高知女子大学看護学会誌の発行、奨学金の貸与などの活動を行っている。本学会の運営委員の約半数は、本学部の教員が引き受けており、学外のような現場で活躍している運営委員とともに活動に取り組んでいる。また、運営委員以外の学部の教員からも多くの協力を得て、これらの諸活動をスムーズに展開することができている。

1) 第44回高知女子大学看護学会の開催

第44回高知女子大学看護学会は、昨年度と同じく「変動する世界の中で『ケアとキュアの融合』を刷新する」をメインテーマに平成30年7月14日(土)に高知県立大学池キャンパスにて開催した。当日は卒業生・修了生をはじめ県内外の施設の看護職者ら136名の皆様の参加を得た。

午前は、上智大学総合人間科学部看護学科の渡邊知映先生を講師に、「ケアとキュアの融合の先にある看護技術の社会的評価」のテーマでご講演いただいた。講演後のアンケートでは、「医療行政から考える看護のケアの質について考えさせられた。どのように反映させていくのか現場を担う看護師の質が大きく関わると思う。」「看護技術が社会的評価をうけることの難しさと大切さをあらためて実感した。」「目的を明確に看護実践を行う意識を常に持つことが専門職として大切。」「看護実践のアウトカムを評価することの大切さを感じた」などの意見が寄せられ、ケアとキュアの融合による新たな技術として看護を可視化することで、看護が発展する可能性を示していただいた貴重な機会となった。

午後は7つのワークショップを開催し、66名の参加があった。参加者からは、「様々なバックグラウンドの方とディスカッションができ、面白かった」「対象者の力を引き出すことの必要性を改めて感じた」「看護師としての関わる基本や、新しい視点を学んだ」「自分の課題解決につながるような討議が聞けた」などの感想が寄せられた。

<ワークショップのテーマ>

- ①社会的ハイリスク妊婦に焦点をあてた妊娠期からの包括的支援
- ②慢性疾患をもつ人のリハビリテーションにおける看護ケアとキュア
- ③思春期のこどもたちの発達とこころのケア ～それぞれの立場からこどもたちの生活を支援しよう～
- ④急性期医療におけるエンドオブライフケア～患者の権利を守るために～
- ⑤専門職として主体的に学び続ける意味
- ⑥ケアとキュアの融合を創るシームレスな高齢者の退院支援
- ⑦看護の実践を語ることで気づく自己の成長

2) 高知女子大学看護学会誌の発行について

学会誌を2巻発行した。詳細は以下の通りである。

- ・高知女子大学看護学会誌 第43巻2号：平成30年6月発行
原著論文11編、研究報告2編、平成29年度公開講座報告
- ・高知女子大学看護学会誌 第44巻1号：平成30年12月発行
原著論文9編、総説1編、研究報告6編

第44回高知女子大学看護学会報告、平成30年度高知女子大学看護学会総会報告

3) 平成 30 年度 高知女子大学看護学会「公開講座」について

平成 30 年度の公開講座は、地域に貢献できる看護職の育成、地域の専門職とともに歩む学会を目指し、「やってみてわかる！看護の量的研究」「やってみてわかる！看護の質的研究」（高知県立大学共催）をテーマに各 2 回、計 4 回開催した。

平成 30 年 9 月 22 日（土）「やってみてわかる！看護の量的研究」

第 1 回「質問紙の作成」

講師 内川洋子（高知県立大学准教授）

第 2 回「研究デザインからデータ分析・結果の記述・考察の視点まで」

講師 井上正隆（高知県立大学講師）

平成 30 年 9 月 29 日（土）「やってみてわかる！看護の量的研究」

第 1 回「インタビューガイドの作成とインタビューの実際」

講師 高谷 恭子（高知県立大学講師）

第 2 回「インタビューデータの分析」

講師 池添志乃（高知県立大学教授）

参加者は看護師、助産師、看護教員、大学院生、学生、参加者数は第 1 回 29 名、第 2 回 30 名、第 3 回 22 名、第 4 回 25 名で、1 日を通しての参加者がほとんどであった。実施後のアンケート評価（100 名 回収率 94.3%）では、答えてくださった方のうち 92%の方が、満足～とても満足と答えていた。また、「わかりやすくてとてもよかった」「すごく分かりやすかったし楽しかったです。研究は難しいというイメージがありましたが、メンバーと一緒に頑張って出来そうです。」「県外から来た甲斐がありました。笑顔が素敵な先生でこういう風にインタビューしたら話したいと思いました。私もそうできるように心がけます。」「難しく捉えていましたが、自分にも少しできそうな、取り掛かり始めやすくなりました。初めて本格的に質的研究をするにあたって、イメージがつかしました。」などなどのコメントがよせられていた。昨年度、参加者がこれまでより少なく、今年度の様子を見た上で来年度内容の変更などを検討することが課題となっていた。しかし、今年度はまた例年並みの参加者数であり、内容の変更より、広報の方法などの検討が必要と考えられた。また、今年の傾向としては、量的研究、質的研究の両方に大学院生の参加があり、教育施設への広報なども検討していく必要があるだろう。

4) 奨学金の貸与

平成 30 年度は奨学金への応募者は 1 名であった。奨学生選考委員会を 7 月に開催し、奨学金選考基準に従い応募者の選考を行なった。その結果を第 44 回高知女子大学看護学会総会で報告し、奨学生としての承認が得られ、1 名に奨学金を貸与した。